

英国留学 きっかけと1年目の苦勞

ロンドン大学クイーン・メアリー校リサーチアソシエイト

田谷修一郎 (たや しゅういちろう)

渡英のきっかけは2007年の夏、ある先生から「サウサンプトンのウェンディ・アダムスがポストドクを募集している」というメールをいただいたことでした。当時私は奥行き知覚の学習に関する研究で博士号を取得したばかりでしたが、ウェンディはまさにこのテーマでネイチャー・ニューロサイエンスをはじめ数多くの重要誌に優れた論文を発表している気鋭の研究者です。そんな「雲の上の人」の下で働けるならばそれはすばらしいだろうと思いましたが、同時に自分が雇われるとは到底思えませんでした。宝くじを買うような気持ちでCV(履歴書と業績書を合わせたもの)をメールし、電話面接を経て「クリスマス前までに来てほしい」という返事を受け取ったときは嬉しいと同時に驚きました。

こうして2008年1月からサウサンプトン大学心理学科に籍を置くことになりました。覚悟はしていましたが、実際に海外で働くというのはなかなか大変なことだとすぐに実感しました。なんとと言っても言語の壁がありますが、それ以上にストレスだったのが細かい慣習の違いでした。たとえば、廊下を歩いていて知人とすれ違うとき、その人がそこまで親しいわけでもなく、しかし黙って通り過ぎるのもどうかと思われる場合、日本では多くの方がほぼ自動的に会釈するのではないかと思います。しかしこうした自動化され身体化されている「日本の文脈」は当然ながらイギリスでは全く役に立ちません。逆に自動的な反応を抑制

し、その場に合った反応を意識する必要があります。これらひとつひとつは些細なことですが、万事この調子なので一日の終わりにはかなりの疲労を感じました。日常的な行動のほとんどが自動化されている、というのは心理学者にとってそれこそ教科書レベルの話ではないかと思いますが、まさに身をもって思い知った次第です。

仕事面でも強いプレッシャーがありました。契約期間は1年しかなく、そのうちに何か成果を出さなくてはなりません。ウェンディからは二つのテーマが与えられました。ひとつは触覚情報に基づく視覚の学習に関する研究です。これは私の博士論文の延長にあり、そもそもはこのテーマに取り組むことを希望して応募したのでした。もうひとつはこれまでに取り組んだことのない視覚的注意の研究です。ひとまず、3月初頭に締め切りのある国際学会に要約を投稿する、という目標を立てました。つまりそれまでに学会発表できるくらいのデータを取れたならば1年以内になんらかの成果を出せるだろうと踏んだわけです。目標達成のため1月、2月はほぼ休みなく働きました。当時はいつも夜8時くらいまで研究室に残っていたのですが、サウサンプトンでその時間まで働いている人間はほぼ皆無で、見回りの警備員によく怪訝な目で見られたものです。無事要約を投稿した3月の週末、初めて英国内を旅行しました。イギリスには珍しい快晴の日、緑の丘にストーン・ヘンジを見た



Profile — 田谷修一郎

2007年、九州大学にて博士号取得。金沢大学研究員、サウサンプトン大学リサーチフェローなどを経て現職。専門は実験心理学(3次元知覚・学習・注意・眼球運動)。主な著書は、『錯視の科学ハンドブック』(分担執筆、東京大学出版会)、『感覚知覚心理学(朝倉心理学講座 第6巻)』(分担執筆、朝倉書店)など。

その日のことは今でもよく覚えています。研究はうまくいったりいかなかったりするものですが、幸いテーマのひとつは実を結び、成果は後にジャーナル・オブ・ビジョンという雑誌に採択されました。

契約期間の終了が近づいた頃、このまま日本に戻るのが物足りなくなった私はイギリスの大学で公募を探しはじめていました。いくつかの大学で面接を受け、運良く今のポストを得ることができました。現在従事しているのは視覚的注意に関する学際的プロジェクトです。サウサンプトンで手をつけた新たな研究テーマを次に繋げることができたと感じています。

2011年4月現在、イギリスに住みはじめてから3年が過ぎ、生活についての不便を感じることは少なくなっています。今回、渡英したての当時に思い出して書かせていただきました。これから留学予定の方や今後留学を検討している方の参考に、また今まさに海外で苦勞されている方の励みになれば幸いです。